

東京の橋

下町の誌上橋めぐり—豊海橋 永井荷風が愛でた景色と橋の考案者

日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授（産業考古学会 会長）

伊 東 孝

日本橋川の支川である亀島川を通過した舟は、左折して日本橋川に入る。「橋めぐり」のコースでは、茅場橋に向かうが、ここでは日本橋川の第一橋梁である豊海橋^{とよみばし}から話をはじめ。豊海橋については、連載の第二回（平成20年4月発行の本誌第40号参照）で、重厚な永代橋に負けないように、部材が太いラーメン構造のフィーレンデル橋を採用したと紹介した。また豊海橋から見る永代橋の眺めを永井荷風が好きで、豊海橋の四角の骨組みが構成する額縁効果が、永代橋の姿を引き立てたのではないかと推測した。今回は、主にこの二点と橋の考案者であるフィーレンデルについて、動いている橋めぐりの舟ではなかなか説明できない話をする。

1 永井荷風の父 ——久一郎をめぐる土木人間相関図

永井荷風が、下町を愛し、現在いう「まち歩き」の創始者のひとりであることはまちがいないが、その前に彼のお父さん：永井久一郎について若干紹介しておく。というのは、土木に大いに関係があるからだ。

久一郎（喜永4年8月2日～大正2年1月2日）は愛知県の生まれ。開成学校（のちの大学南校）に学び、名古屋藩の米国留学生の一員に選ばれて渡米し、英語とラテン語を習得して帰国。翌年の明治7年、工部省に就職。引き続いて文部省に転

じ、医務局勤務、さらに書籍館兼博物館勤務となる。12年には内務省衛生局に転勤し、衛生統計の調査にあたり、13年には初代統計課長にもなっている（この年、文部大臣芳川顕正の秘書官になったという指摘もある。芳川顕正は、日本の近代都市計画の最初である東京市区改正計画案（芳川案）の生みの親である）。

以上のように、ほぼ毎年めまぐるしく職場が変わった。果たして仕事をこなせたのかと心配するが、有能な官僚であったに違いない。

84年には、ロンドンで開催された万国衛生会議に政府代表として出席、そこでバルトン（William K. Burton 安政2（1856）年5月11日～明治32（1899）年8月5日）に出遭った。帰国後、衛生局の長与専斎に招聘を進言、バルトン来日のきっかけをつくった。バルトンは、有名なお雇い外国人の一人で、「日本の上下水道、衛生工学の父」と呼ばれている。彼の功績は、わが国創成期の上下水道界に与えた大きな影響と実績である。明治19年に帝国大学工科大学に衛生工学講座が創設されたのに伴い（このとき久一郎は、帝国大学書記官）、初代講師として招聘され、明治20（1887）年に来日した。東京水道顧問技師、内務省衛生局顧問技師を兼務し、全国各都市の衛生調査、上下水道計画を行っている。大学では、当初の3年間が、9年間に延長されて在任した。後、後藤新平に請われて台湾に渡り、台北・淡水・基隆・台南などの衛生調



写真1 豊海橋側面景

下路式のフィーレンデール橋。上弦材の微妙なカーブが、骨太で武骨になる橋に柔らかみを与える。垂直材の突起物は、ライトアップ用の照明器具ボックス。昼間は目立つ。

査・水道計画に参画したが、台湾で調査中、病気になり、英国へ帰国する直前、東京で死亡した(明治32年)。43歳。墓は青山霊園にある。バルトンは、凌雲閣(明治23年竣工)の設計者でもある。凌雲閣は巷では浅草十二階の方が通りがよく、日本で最初の電動式エレベーターが設置されたことでも知られる。しかしバルトンの設計ではエレベーターの設置を考慮しておらず、設計時の構造強度ではエレベーターの施工は危険であると猛烈に反対したといわれる。関東大震災で8階付近から上は崩れたが、バルトンの指摘が正しかったのか、それともよくぞ8階まで残ったというべきか。

バルトンはまた、写真にも造詣が深く、英国王立写真協会の正会員であり、黎明期の日本写真界で活躍した小川一真とともに日本写真会を創立している。小川一真は、凌雲閣竣工後の翌年、凌雲閣で開催された「百美人」コンテストのための写真撮影をしている。

話が少しずれたが、永井久一郎をめぐるでも、近代土木界に関係する人間関関図が描けることが

わかる。

永井荷風が父の影響をどのように受けたのか(また受けなかったのか)は、寡聞にして知らぬが、父の仕事の関係で、また父の人脈の関係で荷風が『あめりか物語』『ふらんす物語』を書けたことだけは確かである。

2 月明かりの豊海橋からの景色と荷風

さて話の中心は、豊海橋である。豊海橋からの永代橋の眺めを荷風が愛でたことは、今まで何回も紹介したが、実は出典を確認したことはなかった。今回、出典である『断腸亭日乗』にあたってみた。ご存知の方も多いと思うが、これは荷風の日記である。なぜこのようなタイトルなのか。意味も不明である。「断腸亭」というのは彼の書斎の名称だが、「断腸」は、彼が腸に持病のあったこと、および断腸花(懐う人が来ないので女性が涙を流し、涙の落ちた処からこの花が生えたという)の別名をもつ秋海棠が好きで、庭先に植えたことに由来する。「日乗」は日記のこと。大正6(1917)



写真2 端正な豊海橋正面景

橋門構の梁と門柱トップまた各部にもRを入れて収め、柔らかさを心がける。
デザインにはひじょうに気配りのされた橋であることがわかる。

年9月16日から書き始め、死の前日の昭和34(1959)年4月29日まで40年以上にわたって書かれている。

日記の昭和10年12月7日のところに、めざす記述を見つけた(今回、『断腸亭日乗』の全部を読みきった訳ではない)。医者から消化剤をもらった荷風は、箱崎川(現在は埋立てられている)にかかっていた土州橋をわたる。

「再び街路に出づるに短き日は早くも暮れ果て十日過の月空に浮びたり。土州橋を渡り箱崎町に立並びたる倉庫の間のさびしき道を歩み高尾稲荷の祠前に出づ。いと狭き境内に何やら青き色したる自然石の碑あり。あたり暗くして碑文は読み難し」

高尾稲荷は現存していたので、現地に行ってみた。しかし今日、境内というほどの広さはなく、高尾稲荷の敷地は、幅が1間半弱の2.3m、奥行きが3間しかなかった。管理棟(?)を含めると、全体の敷地はもう少し広いが、駐車場代わりに使われていた。ところで高尾稲荷の由来は何か。由来板が設置されていた。

江戸の初期、仙台藩主伊達綱宗から見初められた遊女の高尾太夫が、綱宗の意に従わなかったため、楼船上で吊り斬りにされ、隅田川に捨てられた。稲荷は、遺体が引き揚げられた場所に祀ったのに因む。当初は隅田川沿いにあったが、明治初期、道路建設や日本銀行開拓庁などが建設されるため、現在のところに移転した。しかし当時の地図をみると、境内地はもっと広がった。高尾稲荷の右隣の有料駐車場や周辺も、かつては境内地だったにちがいない。

荷風のいう「青き色したる自然石」らしきものは敷地の右隅にあったが、それが荷風のいう「碑」なのか否かは、判別できなかった。

「石の鳥居前の小径は直に新堀の河岸通なる豊海橋のほとりに通ずるなり」

石の鳥居はなく、木製(?)の赤い鳥居となり、現在の敷地は河岸通りから曲がった通りに面している。日本橋川と北側にある道路との間に挟まれた区域(一部道路の反対側を含む)は、昭和30年代の地図でも北新堀町と呼んでいる。現在は日本橋箱崎町である。

「豊海橋鐵骨の間より斜に永代橋と佐賀町邊の燈火を見渡す景色、今宵は明月の光を得て白晝に見るよりも稍画趣あり」

ここがポイントのところである。「豊海橋鐵骨の間より斜に永代橋…を見渡す景色、…画趣あり」とある。また見る景色は、「鐵骨の間」から眺める額縁の景色である。しかしよく読めば、永代橋だけでなく、左側に展開した佐賀町の倉庫群を含んでいた。また彼は、昼間見るよりも夜の景色の方が気に入っていたことがわかる。もう少し先を読もう。

「満々たる暮潮は月光をあびてきらきらと輝き、橋下の石垣または繋がれたる運送船の舷を打つ水の音亦趣あり」

水面に映る月の光や、ピチャピチャと船に当たる波音を楽しむ。

「電車通りをよこぎり三の橋をわたり、越前堀波止場の捨石に腰をかけてしばらく月を見る。空はよく晴れわたりたれども水の上は青くかすみて遠からぬ石川島の火影もおほろ氣なり」

電車通りは、永代通りのことであり、隅田川沿いに川岸を歩けば、新川に三の橋がかかっていた。『東京新川の今昔』（岡村岑三郎、昭和38年）によれば旧三の橋跡に、昭和3年8月、「東新川橋開通」とあるから、荷風が三の橋をわたった時は、復興橋梁の東新川橋だったと思うが、荷風は以前の橋名で書いたのであろうか。

三の橋をわたっていくと、越前堀があった。このあたりの町名も昭和の30年代は越前堀である。（現在は新川二丁目となっている。）越前堀の捨石の上に腰かけて、対岸の石川島の造船所の明かりを見ながら小休止後、また歩を進める。

「河岸づたひに新高橋をわたり、稲荷橋の欄干によりかかりて深川へ通ふ猪牙舟のゆききしげか



写真3 豊海橋の額に入った永代橋

写真で、荷風の見た対岸の風景を表現するのはむずかしい。

りし昔の情景などを思ひ出す…」

新高橋とあるのは、南高橋のことであろう（一時期、新高橋と呼んだのか?）。また稲荷橋は、以前南高橋のところで図面を紹介した桜川の第一橋梁であったタイド・アーチ橋の稲荷橋である。荷風は、あの図面に描かれていた欄干によりかかり、舟で深川の花街へいく光景を想像した。

3 フィーレンデール：橋の考案者

今回もうひとつ力を入れて調べたのが、橋梁名称の「フィーレンデール」についてである。梯子型の橋を考案した人の名をとってフィーレンデール橋と呼ばれる。橋梁用語辞典ではここまではでているが、考案者のフィーレンデールについての説明はない。ネット情報で調べてみた。

フルネームは、ジュールス・アーサー・フィーレンデール（Jules Arthur Vierendeel、Julesを真ん中に表記しているものもある）で、嘉永4（1852）

年4月10日生まれ、昭和15（1940）年11月8日没。88歳。今でも長生きに入るが、当時としては大変長生きである。ベルギー、リューベン生まれの土木技術者で、大学教授を長く務めた。明治7年リューベンのカソリック大学で土木工学修士の学位を取得、明治9（1876）年から明治18（1885）年までの10年間、鉄鋼メーカーに勤務、明治18年、フランダース西部地域技術部局の主任技術者兼部長に指名された。明治22（1889）年から昭和10（1935）年の46年間、年齢にすると、37歳から83歳まで大学で教鞭をとった。70歳定年の今日では考えられないが、むしろ83歳まで大学で教えることができたという頭脳の明晰さと体力に驚嘆する。

彼が明治22年に著した『静定構造物』（Cours de stabilité des constructions）はほぼ半世紀にわたって構造力学の重要な参考書として位置付けられていた。明治29年には彼が関わった建築構造物群の実績に対して賞が与えられた（翌明治30（1897）年から明治35（1902）年にわたって作品集が刊行された）。同じく明治29年には、フィーレンデール・タイプを発案して、構造解析も確立した。実際に最初の橋が架設されたのは、6年後の明治35年で、母国ベルギーのアベルジェム（Avelgem）のシェルト（Scheldt）川であった。部材が余り節約できず、また計算が複雑なため、フィーレンデール橋はベルギー以外では余り架設されることはなかった。しかしベルギーではRC構造をふくめ、多くのフィーレンデール橋が架設された。なぜかといえば、前述したように大学での教育歴が長いこともあって、彼の教え子がフィーレンデール橋を設計したからである。フィーレンデール橋は、作家のストレイフェルス（Stijn Streuvels）の作品『ウォーターホエクでの破滅（de teleurgang van de waterhoek）』（昭和2年）を通じて世に知られるようになった。豊海橋の着工が大正15年、竣工が昭和2年である。復興局の技術者たちは、有名になる前に知っていたことになる。

フィーレンデール構造はむしろ、建物で採用さ

れた。構造壁も斜材も不要なので、空間が広くとれ、美的にも優れていたからである。平成13年のアメリカ同時多発テロで攻撃されたニューヨークのワールドトレードセンターもフィーレンデール構造であった。

わが国では戦前、フィーレンデール橋は、豊海橋をふくめ3橋架設された。他の2橋は、黒部川第二発電所の管理橋である目黒橋（昭和9年）と秋田県雄勝町の川井橋（昭和9年）である。目黒橋の設計は建築家の山口文象。彼は、永代橋と豊海橋との景観的なバランスをみるため復興局でパース図を描いた。この経験が、目黒橋に生きたといえる。川井橋は、RC（鉄筋コンクリート）製のフィーレンデール橋で、近現代をふくめわが国唯一のRCフィーレンデール橋だと思う。フィーレンデール桁の多連スパンで、全長が約120m、平成4年まで現役だった。幸い一連だけが橋の袂に保存されている。

戦後に架けられたフィーレンデール橋は、10橋にも満たないが、東京では浜松町駅の跨線人道橋（昭和58年）と渋谷区の道玄坂歩道橋（平成12年）に見ることができる。道玄坂歩道橋は、垂直材を交互に斜めに傾け、躍動感を演出している。2001年度のグッドデザイン賞を受賞している。

数少ないとはいえ、ないしはそれ故というべきか、あわせてフィーレンデール橋のすっきりしたデザインを好む愛好者は世界中に多い。そのおかげで、今回の原稿を書くことができたといえる。

*フィーレンデール橋のネット情報にはオランダ語なども含まれている。思い違いや間違いなどもあると思う。ご指摘いただければ幸いである。

【参考文献】

本文記載以外に、下記の文献などを参照した。

- 細馬宏通『浅草十二階』（青土社、2001年）
- 『土木と200人』（土木学会、昭和59年）